

保育内容の各領域を総合的に捉えた表現系授業の一考察 ～絵譜から広がる領域の専門的学び～

森 広樹

キーワード：絵譜、表現、人間関係、健康、言葉、リズム、楽器

概要

近年、教職課程の新たな設置のもと、「教科に関する科目」は「領域に関する専門的事項」として位置付けられた。それに伴い、筆者は保育者養成校の表現系授業を担当する教員の一人として、表現の専門性を中心に、各領域の視点を交え総合的に子どもの表現を捉える活動の展開や指導法に重きを置いた授業のコーディネートについて研究を重ねている。子どもの表しをみとり理解を深めていく上で、多様な視点を持つことは保育者にとって大切なスキルである。保育内容の領域は、正にその視点を育む原点であろう。本論では保育内容の領域「言葉」、「人間関係」、「健康」の内容を踏まえた表現系授業における展開の可能性を考察する。具体的には、2019年後期に開講した「子どもの音楽」授業の集大成として学生が行なった、グループによる絵譜を用いた表現活動の指導案と絵譜を各領域の視点をを用いて分析。学生の模擬実践の事例を通して、それらの視点を学生がどう捉えているか、また活動の広がりデザインする上でどのような影響があるかを考察する。

1. はじめに

本科一年生に向けて開講している「子どもの音楽」の授業では、子どもの表現に対する理解を深める第一歩として、まずは学生自身が音やリズム、楽器と触れ合い、自分なりに表現する楽しみを味わう体験から学ぶ姿勢を大切にしている。「幼児教育 知の探求 遊びのフォークロア」にて青木らは、「保育者は一定の保育年限の間、保育の当事者として責任を持ち、幼児たちの実態に応じて生活を構想する。あそびの主体者は幼児であるが、保育者は遊びにきわめて強い影響を及ぶ。遊びの展開を援助するという意味で、保育者も遊びの主体者である」¹⁾と語っている。すなわち、子どもが安心して活動を広げることのできる環境には、保育者自身の主体性もまた必要不可欠な要素の一つであることが示されている。子どもの生活する、あそぶ実態に伴い保育者が主体的に援助を繰り返し広げていく力は、まず自分自身が様々な環境や素材に親しみ、あそび込むこと、そしてそれらの体験を振り返る中でたくさんの気付きを持つことを繰り返し経験することから成長の第一歩を遂げると考えている。本論で提示する絵譜を用いたりリズムあそびもまた、学生自身があそび込むことを通して、子どもの表現を支える指導法や援助法について各々が思いを巡らせることを目的とした活動である。

1.1. 絵譜の仕組み

絵譜とは、その名の通りいわば絵を用いて作成した楽譜のようなものである。譜例1は楽曲「やきいもグーチーパー」を題材とした絵譜である。また、ここでは絵譜のリズムを解説するために、イラストの下にリズム譜を添えている。（普段の授業では学生が楽譜という概念にとらわれ過ぎないように、敢えてリズムの可視化はしていない。）譜例1は、1. 下、上に配置されている小さいやきいも、2. 大きなやきいも、3. グーチョキパーの3つのイラストから構成されている。また1. は四分音符のリズムで左右の肩を交

1.3. 各領域の視点を交えた活動の展開

「子どもの音楽」における絵譜の活動では、まず1.2.で提示した基本的な作業を行い、実際にグループごとにあそんでみる。ここでは、繰り返しあそぶ時間を設けることで、自分たちが作ったリズムあそびの特徴を把握することが大切である。次に、それぞれの絵譜を様々な視点を持って見直し、活動の新たな展開を模索する時間を設けている。このようなワークでは、グループごとに作業に対しての満足度に伴い時間の掛け方が異なるケースが頻繁に見られる。授業者としては、学生自身が活動の表現性を積極的に深めるきっかけになるよう、あえて作業を2分割化している。また、活動の広がりを探求する際、授業者は以下3つの視点を学生と共有している。

- 1) ひととの関わりを交えたあそびの広がり
- 2) 言葉を交えたあそびの広がり
- 3) 工夫したり協力することで生まれるあそびの広がり

1)～3)は、保育内容の領域「表現」はもちろんのこと「健康」、「人間関係」、そして「言葉」の内容を意識して提案した視点である。ここでは、各領域の専門性を視点に取り入れることで、絵譜の表現活動の幅をさらに広げていくことを目的としている。次に、絵譜のあそびを広げる3つの視点をA,B,Cと種類別に配置し、「表現」以外の各領域の内容と各視点との関係性を示す。

視点A：ひととの関わりを交えたあそびの広がり

人間関係：先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。

健康：先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。

いろいろなあそびの中で十分に体を動かす。

視点B：言葉を交えたあそびの広がり

言葉：生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。

いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。

視点C：工夫したり、協力することで生まれるあそびの広がり

人間関係：友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり協力したりなどする。

視点Aは、先生や友達と心と体を触れ合わせながらリズムを奏でることを通して、喜びを味わったり、十分に体を動かしたりすることを目的としている。また互いの表現をみとりながら活動することを通して、安定感を持って活動することを意味する。視点Bでは、言葉や擬音を用い、リズムに乗ることを通して、言葉の響きや音の美しさに触れたり、絵から連想される動きや言葉からイメージを豊かに膨らませながら活動することを示している。視点Cは、好きな楽器に触れ、それぞれ各自鳴らし方を工夫してみたり、周りの人と協力しながら一曲を演奏することを目的としているのである。

2. 3つの視点から考える活動の広がり

ここでは2019年後期「子どもの音楽」授業から絵譜の活動を行なった模擬実践の中で、学生がこれらの視点を具体的にどのように捉えていたか、またそれらの視点をを用いてどのようにあそびを展開しているのかを考察する。考察の方法としては、学生が作った絵譜と、模擬実践における指導の記録を用いている。(模擬実践では、4～5名の先生役が25名ほどの幼児役に絵譜の指導を行っている。)

本研究では、授業内で学生が作成した絵譜、指導案、振り返りシートを分析の対象としている。学生に対しては、作品・文章データは個人情報が特定されない形で扱うこと、研究目的以外では使用しないことを書面および口頭で説明し、研究協力への同意を得ている。

2.1. 活動の事例を通して考察するあそびの広がり

事例Ⅰ：視点Bの特性を活かした表現

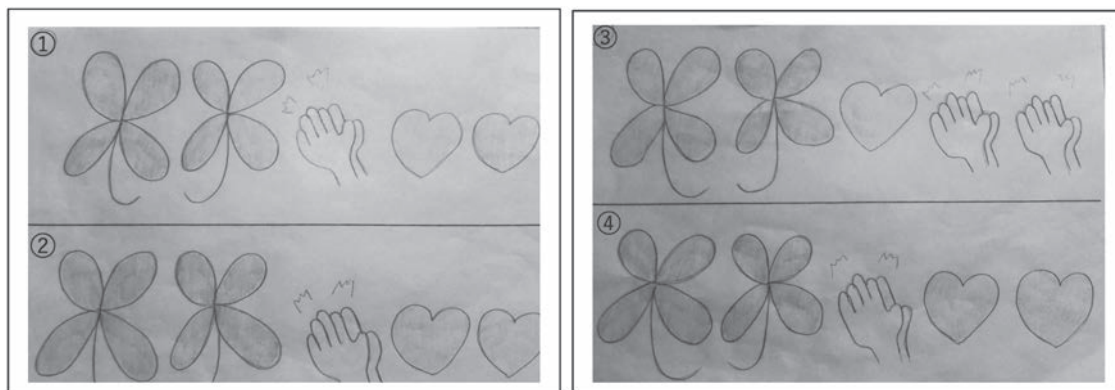


Figure 1. 絵譜「幸せなら手をたたこう」

Figure 1. は、楽曲「幸せなら手をたたこう」をもとに、学生がグループで作成した絵譜である。本作は1. 四つ葉のクローバー、2. 手をたたく、3. ハートの3つのイラストでできている。1. 四つ葉のクローバーは、二分音符分の長さで、右手は左の肩を、左手は右の肩を触る。（この時、学生の重心もどことなく左右に振れていた。）2. 手をたたくイラストは、見ての通り両手で手をたたき、四分音符でリズムを取っている。3. のハートでは、四分音符のリズムでジャンプするよう構成されている。

本活動でまず注目すべきは、言葉を巧みに使った先生役の学生の指導法である。はじめに、「幸せそうに肩を触りながら左右に体を揺らしてみよう」との声掛けがあり、続いて「幸せなら手をたたいて見よう」、そして「嬉しい気持ちでジャンプしてみよう」との声掛けがあった。これは、Figure 1. ①に示されている一連のリズムを言葉と体で表現している学生（先生役）の様子である。この一連の声掛けは、楽曲の歌詞やテーマ性にしっかりと関連付けて行われており、言葉を用いることで、子どもに曲の世界観をイメージしながら表現を楽しんで欲しいと思う学生のねがいが込められている。また幼児役の学生と実践的にリズムを伝える際、次のようなセリフが添えられていた。（譜例2）

セリフ：	か～た	か～た	パン	ドン	ドン
リズム：					

譜例 2: リズムとセリフ

繰り返し実践するに伴い、幼児役の学生たちもセリフを口ずさみながらリズムに乗って体を動かすことを楽しんでいる様子が伺えた。触れる体の部分を言葉で発したり、動作に伴い擬音を用いるなどすることにより、幼児役、指導者役ともにより面白みを感じながら活動をしている姿が見られた。以上のこと

から、学生が声掛けやリズムにセリフを用いることにより、領域「言葉」を主とした視点Bを活動の構成に取り入れている様子が考察できた。

事例Ⅱ：視点Aの特性を主に活かした表現

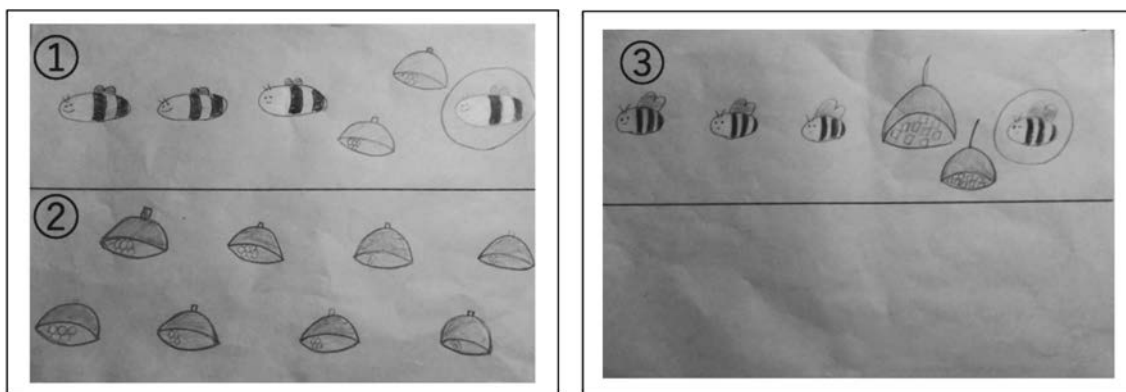


Figure 2. 絵譜「ぶん ぶん ぶん」

Figure 2. は楽曲「ぶん ぶん ぶん」をもとに作成された絵譜である。このグループの発表でまず特記すべきは、活動開始時からみんなで円を組んでいる点にある。学生からのヒヤリングでは、円を組むといったフォーメーションを取ることで、皆が安心感を持って活動できるよう工夫していると語っていた。これは視点Aに含んだ領域「健康」の内容「先生や友達と触れ合い、安定感を持って行動する」に値する配慮であると考えられる。本作は、1. はち、2. はちの巣、3. 円に囲われたはちの3つのイラストから成り立っている。1. はちでは、皆が好きにはちのポーズを3回とる。続いて2. はちの巣では、巣の数分だけ足踏みをする。そして3. 円で囲われたはちでは、隣の人と両手をタッチする動作で構成されている。また、1～3のイラストに伴う動きは、すべて四分音符のリズムで行われるため、隣の人とのハイタッチを他のイラストの時に行うなど、ハイタッチのタイミングをシャッフルすることができ、多少のゲーム感が味わえることも魅力の一つであった。周りの友達や先生と関わり、また触れ合いながらあそびが展開されており、視点Aがうまく活動に反映していることが確認できた。また他のグループが「ぶん ぶん ぶん」の楽曲を使用して絵譜の活動をした際、楽曲中の「おいけの周りにお花がさいたよ」の部分で、指導者役の学生の周りを幼児役がかけっこしながら回るという動きを取り入れており、今回の発表の中で群を抜いて運動量が多い動きを活動に盛り込んでいたことも大変印象的であった。

事例Ⅲ：視点Cの特性を主に活かした活動

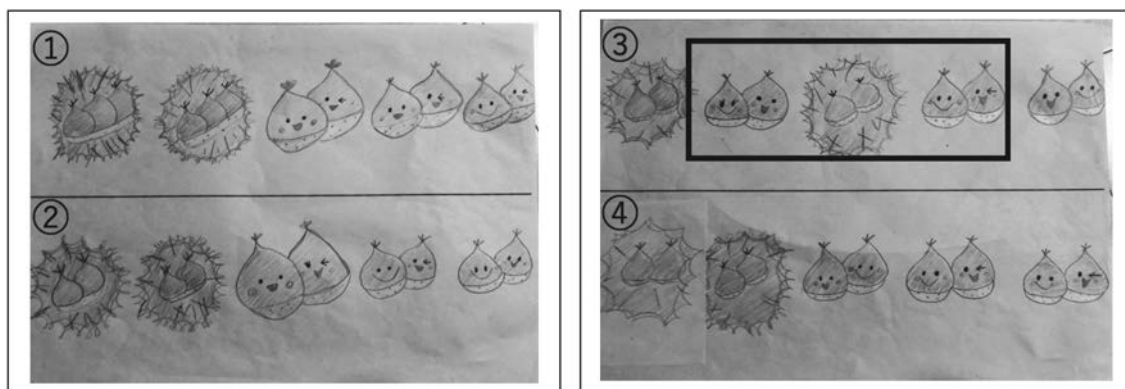


Figure 3. 絵譜「大きな栗の木下で」

Figure 3. は、楽曲「大きな栗の木下で」をもとに作成された絵譜である。樹皮が描かれているイラストは2分音符のリズムで両手をクロスして肩を、栗の実が描かれているイラストでは、四分音符分で太股をたたくよう構成されている。本作で注目すべきは③の四角内に描かれている「4分音符-2分音符-4分音符」で構成されたシンコペーションのリズムである。そもそもシンコペーションとは、強拍と弱拍の位置を意図的に変え、リズムに変化を与える切分法である。幼児にとってはきわめて複雑なリズムパターンであり、指導する際には十分な援助と配慮が必要である。通常シンコペーションは、「飛行機」や「デザート」など、シンコペーションのリズム要素が発音に伴い自然と発生する言葉を使って指導されるケースが多い。(Figure 4) 言葉の持つリズムを実際に口にしながら体の一部や楽器をたたくことで、より自然な流れでシンコペーションを体験できるのである。

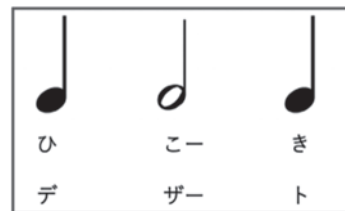


Figure 4: 言葉とリズム

本グループでは、音高が極端に異なった2つのウッドブロックを使用することにより、シンコペーションのリズムを幼児役の学生に体験させていた。指導役の学生は、音高の低いウッドブロックで2部音符を示す樹皮のイラスト部分を、音高の高いウッドブロックでは、四分音符を示す栗の実のイラスト部分を奏でており、幼児役は低い音が聴こえると肩を、高い音が聴こえると太股を叩く。幼児役は、Figure 3の①～②を繰り返し行うことを通し、音高の違いに伴い、異なった動作をする行為を楽しみ、慣れてきたところで③のシンコペーションのリズムを自然と受け入れることが出来るよう構成されているのである。また実際に幼児役が代わりがわりにウッドブロックを奏で、それに合わせ先生役、他の幼児役がリズムあそびを展開したり、最終的には皆でカスタネットを使い楽しんで合奏する場面が見受けられた。複雑なリズムに対しても楽器の音高の違いを用い、幼児役自身が身体や楽器で奏でる機会を設けるなどの工夫を通して、皆が協力し楽しみながら挑むことが出来るよう構成された、まさに視点Cの特徴が盛り込まれている活動であった。

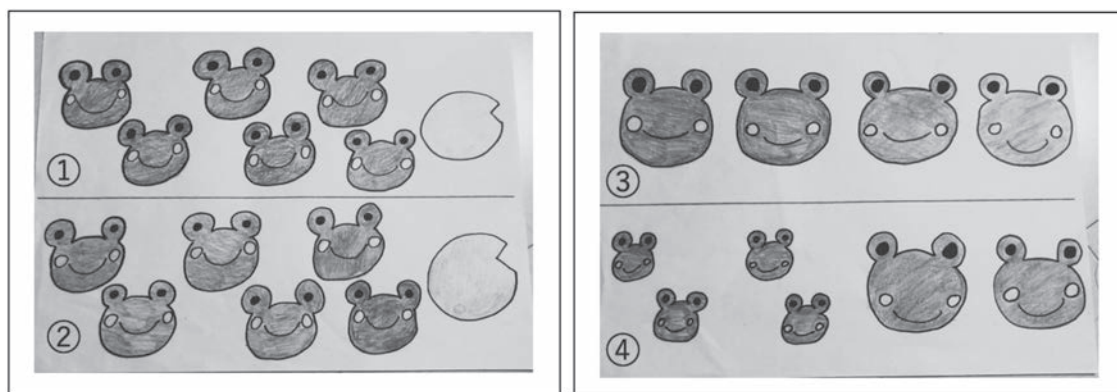


Figure 4. 絵譜 「かえるのうた」

楽曲「かえるのうた」をもとに Figure 4 の絵譜を作成したグループもまた、視点Cに重きを置き、楽器を用いることで活動の幅を広げることに挑んでいた。本作では、1. 小さく描かれているかえるを4分音符、大きく描かれているかえると葉っぱを2部音符のリズムを用いて、タンバリン、鈴、マラカス、そしてシンバルの4つの楽器を用いた合奏を楽しむ活動が展開されていた。体を使って一通りリズムを覚えたところで、幼児役の学生は好きな楽器を選び、絵譜のリズムを奏でる。先生役の学生は「大人のかえるはどんな音?」「子どものかえるはどんな音?」などの声掛けをし、それに伴い大きな音で奏で

たり、小さな音で奏でたりと、音量や奏法を各々がイメージに合わせ工夫して奏でながら合奏していた。また、3つのグループに分かれ、楽器を奏でながら輪唱を行い、音の重なりを楽しんだり、他者が奏でる音に興味を示す姿が見受けられた。

2.2. 結果と考察

18組の活動内容の振り返りをまとめ、学生がどの視点に重きをおいて活動していたかを分析したところ、以下のような結果となった。(学生には複数の視点を活動内容に含んで良いと周知している。)

視点A～C	グループ1～18	合計
視点A: ひととの関わりを交えたあそびの広がり	1, 2, 4, 5, 7, 8, 10, 12, 13, 15, 16, 17, 18	13組
視点B: 言葉を交えたあそびの広がり	3, 6, 12, 14	4組
視点C: 工夫したり、協力することで生まれるあそびの広がり	1, 3, 6, 9, 10, 11, 12, 14, 17	9組

まずはじめに、本活動を通して視点Aを重視したというグループが全体の7割近く、視点Bは2割近く、視点Cが5割という結果から、言葉を交えたあそびの広がりを用いたグループが極端に少なかったことがわかった。また視点Bを選択したグループのすべてが視点Cを選択していることが明らかになった。これらのグループの活動内容に目を向けると、全てのグループが最終的に楽器を使用していることが判明した。このことから、合奏を行う上でリズムを自然なかたちで身に付けるために言葉を使っていたグループが多かったと予測することができる。

次に全体の5割を占める視点Cのグループの活動内容に着目すると、9組中7組のグループが楽器を用いた合奏を行なっていることがわかった。残りの2組は「かえるのうた」を用いてリズムあそびと輪唱を行なったグループ(10)、もうひと組は、楽曲「ぶん ぶん ぶん」を使用し、多様なフォーメーションを組む工夫をしていたグループ(12)であった。音楽表現の授業であるということもあるが、振り返りの内容を見ると「みなで協力する」や「共通の目的を見出す」といったキーワードと合奏を結び付けて活動のねらいとしているグループが圧倒的に多かった。

また、視点Aを意識したグループが全体の7割を占めていることから、多くの学生が絵譜の活動の広がりを構想する上で、友達や先生との触れ合いを重視していることが発覚した。振り返りの内容に着目すると、出来るようになったことを友達と共有することで、更に楽しめる、あそびが広がるなどといった意見が多いことがわかった。実際、模擬実践において他者との関わりを交えたあそびに時間を割いているグループの発表は、常に安定したテンションで学生たちがあそびを楽しんでいる姿が見受けられた。また、13組中3組と少数ではあるが、「一人でやるより、友達や先生と交わった方がリズムを捉えやすい」と、他者との関わりをある種援助方法の一環として捉えているグループもあった。

3. まとめと今後の課題

本論では、絵譜を用いた模擬実践の中で、学生が各領域の視点をどのように捉え、活動に活かしているか事例を通して考察してきた。結果、それぞれのグループが領域の視点を意識することにより、単なるリズムあそびの枠を超え、活動に多彩な広がりをもたらしていることが明らかになった。また、各領域の視点を提示し、活動のねらいを考えることにより、学生がより円滑に、そして積極的に援助法や環境について思考する姿勢が見受けられたことも大きな収穫であった。青木らは「予測」と「不則」の

間の絶え間ない往還によって、遊びの目的はその都度生み出される」²⁾と語る。実際今回の模擬実践においても、幼児役のあそびに取り組む姿勢から、ある種即興的に活動の内容や方向性に調整を加えていたグループも少なくないが、企画の趣旨に拘り抜いた結果、幼児役の些細な反応を見逃してしまっているグループもあった。領域の視点からねらいを定め、丁寧に活動を企画することは、子どもの偶発的な表現性に気付くためであり、活動の趣旨を押し通し保持するためではない。常に変化する子どもの興味関心から生じるあそびの広がりに伴い、柔軟な援助を展開するためにこそ、これら領域の視点が役立つことを、授業の活動を通して伝えていくことの重要性に改めて気付くきっかけとなった。今後は音楽的表現活動における指導法、援助法を各領域の視点から考え、実践的に学ぶことに焦点を当てた授業のコーディネートに励んでいきたい。

参考文献

保育教諭養成課程研究会（2017）「幼稚園教諭養成課程をどうするか～モデルカリキュラムに基づく提案～」萌文書林 初版第1刷
厚生労働省（2018）保育所保育指針
文部科学省（2018）幼稚園教育要領

引用文献

- 1) 青木久子、河邊貴子（2015）「幼児教育 知の探求 8 遊びのフォークロア」萌文書林
第2部 第2章より p.144
- 2) 前掲書 第2部 第3章より p.157